

トーマス・バングズ・ソープ作
アーカンソーの大熊^(N)

A Japanese Translation of "The Big Bear of Arkansas"
by Thomas Bangs Thorpe

横田 和 憲 訳

Kazunori YOKOTA

ミシシッピ川の蒸気船は、頻繁にその定期航路に就航していますが、多様な発着地が1000～2000マイルの航路に存在しています。これらの蒸気船が、「全ての各発着地」で、船客や貨物を上陸させるべく着岸の知らせを流します。その際、如何に種々多彩な船客たちが、奥地を航行する一隻の蒸気船内で目にされることでしょうか。でも多彩なこの情景を思い浮かべることは、実際に目にされた方にしか、まずは出来ない代物なのです。ものの試しに、一つ、ニューオーリンズを出航する蒸気船に乗船なさってみてください。そうすれば、直に、多彩な船客とお知り合いになれます。北米大陸のあらゆる州からの船客たち。世界中から集まった船客たち。もし目敏い方であれば、好ましくも眼前に繰り広げられる、人間性に関する偉大な書物に目を通す手間を厭いさえされなければ、この多彩な船客に喜びを味わったり示唆を受けるのに、事欠くことは無いのです。多彩な人の群れはこう目に映ります。南部の富裕な農園主、錫製品を売り歩くニューイングランドの行商人——北部の商人や、南部の騎手——厳かな司教や、自暴自棄な賭博師——土地投機人や、正直な農民——あらゆる信条と人格とからな

る職業人たち——ミシガンの民、イリノイの民、インディアナの民、^(N) オハイオの民、そしてケンタッキーの民です。加えて、「希有だが多彩な」半馬半鱶^{たぐい}の類に属する人種もいます。この人種は「愛すべきミシシッピ川」に特有の存在であり、この川を単に上ったり下ったりするだけで、生活の糧を得ているかのようにも見えるのです。私は、しばしば、私用、商用の形で、自らをこの多彩な船客の中に身を置いてきました。

*

ある時、私は、ニューオーリンズからミシシッピ川を数マイル北上する旅に出掛けました。急ぎ足で、名うての「高圧無敵の」蒸気船「インヴィンシブル [Invincible]」号に私が乗船したのは、まさに最後の出航ベルが鳴り響いていた時でした。出航と同時に、離岸には付き物の混乱と騒ぎが静まり、私は例の多彩な船客の真ただ中に身を置いていることに気づきました。私の旅はほんの数時間の予定でしたから、船客と懇意になる努力は、取り立ててしようとはしませんでした。船客たちの多くは、おそらく、もう何日も共に旅を続けてきた筈だからです。私としては、その代わりに、「最新の新聞」をポケットから

取り出し、いつにも無く、じっくりと読むことにしました。船客たちはと言えば、それぞれ、気の合う集団に分かれていました。私は新聞を熟読し、船客たちは、いっそう熱を込めて、肌に合う、その場に相応しい話題に大きな花を咲かせていました。その時、私たちは、突如、思いもよらない、インディアン風の大きな叫び声に仰天したのです。その声は「社交の場」で発せられたのですが、そこは甲板の一部で、酒場として割り当てていました。その後で、当然ながら雄叫びが一つ聞こえてきたのですが、その声は取り立てて私たちの関心を引き止め続けはしなかった筈です——というのも、その手の雄叫びは、酒場では、ごく、ありふれた物音だったからです——が、実際には、私たちはこの雄叫びに釘づけになっていました。なんと、大風呂敷の偉業で名高い我らが英雄が酒場に顔を覗かせ、「ビック・バー・オブ・アーカンソー [the Big Bar of Arkansaw] に万歳！」と叫んだからなのです。透かさず、混乱した意味不明のざわめき声が聞こえてきましたが、途切れ途切れの言葉には「馬」、^(N)「人並みはずれた力を持つ男」、^(N)「奴に比べると稲妻の方が遅いぜ」などの言葉が聞き取れました。十分に予測されていたことなのかも知れませんが、酒場でのこの英雄の長居が、そこに居合わせた者すべての耳目を集め、辺りには静寂が漂っていました。皆のこの驚きの、さ中、「ビック・バー」は酒場へと足を踏み入れ、椅子を引き寄せ、ストーブに足を乗せ、肩越しに後ろを振り返りながら、いつもの馴染みの挨拶を口にしたのです。「旅のお方よ、お元気ですかえ？」それから英雄は実にくつろいだ様子で話を続けたのですが、それは、まるで我が故郷「ザ・フォークス・オブ・サイプレス [the Forks of Cypress]」に居るかのような、否、「多分それ以上」のくつろぎ

様でした。酒場に居合わせた者の何人かは、この馴れ馴れしさに、多少ご立腹のようにも見えましたが、中にはこの馴れ馴れしさに感心しきり、という者もいました。とにかく、直ぐに、全ての顔が、微笑みに包まれることになったのです。この闖入者には、一目で、見る者の心を奪ってしまう何かがありました。見るからに、完璧な健康と満足感を享受しており——その目はダイヤモンドの如く輝き、その善良さは素朴なほどに温厚でした。さらに、自らへの揺るぎない信念は抗い難く、^{ひょうきん}剽軽さにさえなっていて現れていました。「恐らく、だよ」と、英雄、曰く。「旅のお方よ」と、誰にも口を挟ませること無く、英雄は話を続けました。「恐らく、旅のお方は、ニューオーリンズを何度も訪問されたことがお有りなんですよ。でも、おいらは、初めてここに来たんだよ。そして、おいらとしては、二度と来たくない場所なんだ。と言うのも、おいらはそこで、馬鹿にされたからなんだよ。今さら何を言ってもしょうがないけど事実なのさ。何人かのご紳士がおいらのことを未熟者扱いしてくださったんだよ。多分おいらは未熟者だったんだろう、そう言ってやったさ。でもな、おいらはアーカンソーの我が家では未熟者なんかじゃないぞえ。まず間違いなく、おいらを馬鹿にした奴らの頭脳こそが、真珠岩の様にやわらかい岩屑で、おいらに言わせれば奴ら自身こそが間違いなく馬鹿なんだよ。本当に何も分かってちゃねーのさ、南瓜の蔦みて一なもんだよ——何にも出来やしねーのさ。例えば農業させれば、間違いなく、奴らはくだらない蕪しか作れねーし、さ——それに射撃をさせてみろや、大きな小屋を狙ってもさ、戸が揺れてるだけのことで玉は当たりもしねーやさ、しかも、この辺りじゃあ最良のライフルを使ってもなんだぜ。さらに奴らは狩猟についての話を持ち出したんだが、

おいらがアーカンソーで良くやるカードゲームはポーカーとハイ・ロウ・ジャックさ、と言うのを聞いて大声で笑いやがったんだ。『ひょっとすると』と、おいらは言ったさ、『チェッカーズやルーレット^(N)の方がお好みかも知れませんがね。』奴らは、さらに腹を抱えて笑いやがった挙げ句に、お前さんがほんとに森の子なんなら、ゲームという語の意味が分かんねーのかね、とお聞きになられたんよ。この問い掛けに、おいらは声を出して笑わずにはいられなかったさ。『もち、よ』と、おいらは大声で言ってやったもんだ。『旅のお方よ、おいらたちがアーカンソーでミートをどうやって捕獲するのかお尋ねなんなら、直ぐにお答えしやすし、熊から猫まで、群れ成す獲物の一覧だってお渡しいたしやす。みんなミートだけんど、ゲームとは言わねーんだよな。』ゲームという言葉は、実際、町の連中の呼び方なんよ。連中に取りっちゃー、ゲームが意味するのは小さなスズメやアオサギ^(N)なのさ。きっと、その手の、屑どもも、おいらの界限にだって生息してるんだろーが、これまで気に留めたことも無かったぜ——どのみち、野鳥など全く取るに足らないもんなのさ。一種類の鳥を除いちゃー、おいらが鳥を的にしたことは一度だって、ねーんだ。しかもよー、40ポンド未満のダチョウを撃つなんてことは、自分を許すことの出来ねー行為だと誓ってたのさ。それ以下の重さのどんな獲物にも、ライフルを構えるつもりは、さらさらねーんだ。今度また、小振りの野生のダチョウに出くわしたら、腕で絞め殺してやるよ。

「野生のダチョウが40ポンドだって？」聞き耳を立てていた酒場の連中が20人、声を揃えて、一斉に叫んだのです。

「そうさな、旅のお方よ、ウソじゃなかったかって？いいかえ、奴めは、あんまり肉が

付き過ぎてて、遠くまで飛べなかったのさ。おいらが銃をぶっ放したら、奴は木から転がり落ちてさー、地面をしたたか打ち付けた拍子に、尻から肉を破裂させやがったんだ。1ポンドもの獣脂の塊が裂け目から転がり出てくる様と言ったら、そりゃー見事なもんだったぜ。」

「一体全体、何処で起こったことなのでしょうかしらね？」一人のインディアナの民が皮肉な表情を浮かべながら尋ねました。

「起こったって！アーカンソーでのことさ。他の何処で起こり得ましようかね、創造的な州、完成された州であるアーカンソー意外の何処で、さ。アーカンソーじゃあ、肥沃な土が地軸の奥の院まで続いてて、お役人は誰にだって分け隔てなく、どんなに僅かな土地だって権利を差し上げのさ。だからよ、馥郁たる空気をチョイと吸い込むだけで、馬のように鼻息荒く元気が出てくるんだ。完璧な州なんだよ、アーカンソーは、ね。」

「蚊を除いてだろうね。」インディアナの民が叫びました。

「そのとおりさ、旅のお方よ、確かに蚊は別じゃて。アーカンソーの蚊めは巨大すぎて、少し厄介な存在になってやがんだ。でもなー、旅のお方よ、奴らは同じ箇所を二度も刺すことなんかしやしないんだ。だから皆さん、数ヶ月、アーカンソーで暮らしてみんさいや。そうすりゃあ、蚊がいくら刺してもワニが気にしないように、アーカンソーの蚊が気にならなくなる筈なのさ。それに奴らがおいらの感情を害することもないのよ、だって感情は皮膚の下にあるもんだから、ね。ただ、一人アーカンソーの蚊にやられた男がいたんだけど、そいつは北部の人だったんだ。アーカンソーの蚊は、どういう分けかは知んねーけど、外部の人間には、地元の人間に対してよりも、きつい仕打ちをするんだよね。それに

しても、蚊どもがああ男を痛めつけたやり方ときちャー、すごいもんだったね！まず男の体が腫れ上がっちゃったんだ、でも奴は破裂するまで刺し続けたんよ。そこで男は分裂したんだ、医者言葉を使えばさ、そして、まるで生の牛肉みたいに赤く爛れちゃったんだ。そして男は、暑さにもかかわらず、悪寒^(N)を覚え、ついには蒸気船に飛び乗って、故郷への旅路に就いちゃったのさ。おいらが知ってる限り、アーカンソーの蚊の仕打ちを、心底、味わったのは、あの男だけなんだ。しかし、蚊にしちゃあごく自然の振舞なんで、奴らに落ち度なんて何も無いんよ。アーカンソーの蚊が巨大なのは、アーカンソーの州そのものが巨大だからさ。アーカンソーでは獣も、樹木も、川も皆んな巨大なのさ。だから、小さい蚊なんてアーカンソーでは何の役にも立たないぜ、籐の茂みで説教をしたって誰も聞いてないのと同じことさ。」

大きな蚊を擁護するような、この有無を言わせぬ論法は、インディアナの民に根を上げさせました。そして論法巧みな我らが英雄は、意気揚々と新たな論を開始させ、如何に沢山の熊が自分の「居住区域」に棲息しているかを説明し始めたのです。この区域には熊が、我らが英雄の言葉を使えば、「ブラックベリーの実が群がり付いてるように沢山、いや、もっと居るかも知んねーよな。」

確信に満ちたこの説明を耳にした、私の傍にいた一人の臆病な小男が、アーカンソーの熊は群れをなして開拓者たちを襲うのですかと尋ねました。

「とんでもねーや」と、我らが英雄は、懇ろにこの主題を温めながら応えました。「違うんだよ、旅のお方よ、だってさ、いいかい、熊の本性からすると群れで行動することはねーのさ。でも奴らが対で、また一匹ずつ、うろつき回る様はなかなか啓発的ではあるがね。

さて、おいらの仕留め方なんだが——愛すべき黒熊ちゃんたち、おいらの銃の発射音をよく知ってたよ、奴らが豚の鳴き声をよく知ってたのと同じなんだ。おいらたちの地域じゃ、奴らは痩せ衰えちまってるぜ、発射音が奴らを震え上がらせちまってるからね。発射音にゃ、恐ろしいほど敏感になってんだよ、可哀想にな。おいらの銃は、完璧な流行り病よ、奴らの間じゃさね——よく聞いてねーと分からねーほど速く、熱風に煽られた香りみてーに、銃声が素早くおいらの手から離れて行くのさ。おいらのボウイー・ナイフ [Bowie-knife]^(N)の素早さと同じようにさ。この、おいらの愛犬ときちャー、すごいんだぜ！そうよ、こいつ奴は、周りの世界は熊まるけだと感じてるもんだから、いとも簡単に熊公を見つちまうんだよ。幸運なのは、こいつ奴が考えたり、しゃべったりしねーことさ。だってね、こいつ奴は生まれつき謙遜な質なもんだから、もしも、世界中のどの猟犬よりも常に先んじて獲物を追うことを皆から賞賛されてるんだと突然こいつ奴が知ったら、そんなことは当たり前のことなんだから、びっくり仰天、即死しちゃうよ。旅のお方よ、こいつ奴が熊の習性を良く知ってる様は、騎手と女の関係と一緒さ。こいつ奴はいつだって然るべき時に吠え立て——然るべき急所に嘯みつき——傷ひとつ受けること無く突進していくんだよ。おいらにゃ分かんねーよ、猟犬が、特別の思し召しによって、熊を仕留めるために創られたのか、でなきゃ、熊が特別の思し召しによって猟犬に仕留められるために創られたのか、についてわね。どっちにしても、おいらが思うに、猟犬と熊が行動を共にすんのがごーく自然なのは神の命なんじゃろうて。きっとそれは、ジョーンズ牧師が諭されるように、結婚を誓った二人の男女が神の命を受けた関係と同じなんだよ。事

実かつてジョーンズはこう仰いましたぜ。『法の前での婚姻は、神の祝福を受けた深遠なる、民の契約なのだ。それはアーカンソーのみならず全ての国に共通している』とね。それに、さ、皆がごく自然にこの言葉を受け入れている様は、おいらジム・ドゲット [Jim Doggett] の愛犬ボウイー・ナイフが熊をごく自然に受け入れている様と、同じなのさ。」

「一年のうちの何時ごろ、熊狩りが行われるのですか？」紳士然とした一人の外国人が質問したが、そのどこか風変わりな手荷物からして、私は紳士が多分ロッキー山脈の麓あたりで狩猟の旅に出ている英国人ではないかと推察した。

「熊狩りの旬と言ってもね、旅のお方よ」と、アーカンソーの英雄は応えながら、「年から年中なんだよ、だから熊狩りは、年中、定期的に行われてるんだ。おいらは何処かの歴史書で読んだことがあるぜ、動物には餌を食べ込んで丸々と太る季節と、それを食い尽して痩せ細る季節があるんだってさ。でもアーカンソーじゃあ、それは違うんだ。事実、アーカンソーの熊どもは、豊かな土地のお陰で亙ぐ大きくなる作物をいつでも食べられるので、一年中ぶっ続けで、丸々と太ってんだよな——そこで、アーカンソーの熊どもは、冬場に、夏場よりも脂ぎってんことを、おいらも認めにゃなんめーて。こういう訳で、アーカンソーの熊どもは、夏には軽やかに走るんだが、冬になると、よたつくだけなんだ。脂、脂！こいつは走るのには強敵さ——脂が付き過ぎると、何物によらず、弱体化しちゃうんだよね。昔、脂のお陰で、鶏よりも優しくなっちゃった野生のダチョウをよく見掛けたもんだ。丸々と太った熊を走らせてみてご覧なさいや、その後で奴らが食うわ食うわの様は異常ですぜ。まるで脂と肉を混ぜ合わせたよう

なもんで、脂と肉の見分けが付けられなくなるほどなのさ。おいらは何度もやってみたんだ。特に思い出すのはある晴れた日のことさ。可愛い牡熊を一匹、走らせてやったのよ。奴の体重からすると、よく走ったもんだと思う、が追い立てる犬たちは直ぐに奴を疲れ果てさせたのよ。おいらが奴の傍へ近づいた時にゃあ、見事なほど汗びっしょりで——熱病に罹ってんじゃねーかと思っちゃったぜ。それから、おいらには、奴めの舌が口から1フィート^(N)も突き出てるのが目に入ったんだ。脇腹が、吹子の様に、波打ってんのさ。頬っぺたと言えばな—、あんまり膨れ上がってるもんだから、不機嫌面さえ分かんね—んだ。この場に及んで、おいらは奴に向かって銃をぶっ放したんだが、危うく茨の茂みに転がり込むところだったぜ。当たった弾丸の穴から蒸気が10フィートも天空めがけて真っ直ぐに立ち昇ったんだからなんだ。思うに、奴の体は高圧構造で出来ており、その煮沸器を、おいらの弾丸が、いわば破裂させちゃったんだよ。

「蒸気のそんな柱は何かとても妙だったですな、さもなければ、その熊はきっと体中に熱^(N)を帯びていたに違いないですね。」例の外国人が声を出して笑いながら指摘した。

「旅のお方よ、仰るとおり、あいつ奴は<熱>を帯びてましたぜ。蒸気の噴出は、つまり、奴が如何に懸命に走ったかを実証してるんですよ。後2マイルも奴を走らせたなら、奴の内臓はドロドロに溶けちゃったこと、疑い無しですぜ。でも、おいらは、尻にもっと脂肪を付けた熊に出会うことを期待してやしたよ、そしたら、そいつは皮ごと熊脂となってる筈なんでさ—。これは単なる戯言じゃ無いですぜ、もっと有り得ないことが、この世では起ってんだからね。」

「一体全体そんなに沢山の熊がどこに棲息しているのですか。」興味を募らせながら例

の英国人が尋ねた。

「ああ、旅のお方よ、奴らはおいらの居住地の近くに棲息してるのよ、そう、愛すべきミシシッピ沿いの、この上なく素敵な地域の一つにでき——完璧な場所なのさ、不都合な事など何もねーんだ。幾つか有ったとしたら、それは、川の『燕尾の湾曲部分』で『近道』が出来るまでの事だったね。でも近道のお陰で悪は全て改善されたんだ。と言うのは、この近道がおいらの住居を川辺りに位置させることにしてくれたんだ——雨の日じゃ、ほんとに大きな利点なんだよね。だってさ、今じゃウィスキーの樽を、水面の高くなった川の舟からおいらの庭先へと、丸太ん棒を転がすのと同じように、簡単に転がせるんだからね。大いなる進展さだ、と言うものさ。これまでは、いつも酒精を壺に入れて陸路で運んでたもんだから、酒精はどんどん蒸発しちゃって、えらく高い買い物になってたんだ。旅のお方よ、ひと月、ふた月、お望みなら一年だって構わないから、おいらの住居に泊ってみて戴けませんかね。そうすりゃあ、おいらの居住地域が直ぐ大好きになられますこと間違い無し、ですわい。食べ物に豊富でござんすよ、豚や引き割りトウモロコシはもちろん、熊のハムやソーセージもたっぷりできー。お休みになる時にゃあ、熊皮の敷布に、枕は山猫皮製じゃが、もちろん針毛は抜いて柔らかく、中にはトウモロコシ殻が詰め込んでありんす。関節という関節にリューマチのお友だちを抱えていらっしゃっても、この寝床だったら、ばたんキューですぜ。おいらは、この寝床を永久安楽床^(N)って名付けたんだ。今度はおいらの土地を見てくんろや。お役人さまだって、こんな素ん晴らしい土地を他には処分できねーさ。あの巨大な樹木、そして、あの肥沃な低地。ああ、一端この土地に種を蒔いたら、早稲で引っこ抜かねー限り、苗の

自然の成長なんて維持できねーんだよ、どんどこどんどこ大きくなっちゃうんだからね。何時だったか、この地域に、ポテトとビートの種を数粒だけ蒔いたことがあったね。あつと言う間に大きくなってさ、対の雄牛だってその成長を止めることなど出来なかったんだ。ちょうどその頃、おいらは愛すべきケンタッキーに仕事で出掛けて行ってたもんだから、三ヶ月も近隣の友人から音沙汰が無かったんだ。と、偶然にも、ここで一人の男に出会ったんだよ。おいらの土地に立ち寄り、ぞっこん惚れ込んだ奴だったんだが、買い取りたいと言って来たんだ。『お気に召しましたかな?』と言ってやったさ。奴は『ぞっこん』と応え、続けて『住居は快適、樹木の生い茂る土地は見事ですな。でも、あの低地だけは一銭の価値も無いみたい』と仰ったわい。『なんでじゃ』と、おいら。『だって』と奴。『だって、何じゃ?』と、おいら。『だって土地一杯が杉株と土饅頭だからですわ、それに、とても開墾できそうに有りません』と奴、曰く。そこで、おいらはこう応えたんだ、『えー!あなたの仰る「杉の切り株」はビートで、「土饅頭」はポテトが植えてある丘なんだよ——思ったとおり、作物が育ち過ぎて、使い物にならなくなってんだよ。土地が肥沃すぎるもんだから、アーカンソーで作付けするのは危険なんだ。そうそう、いつか、でっかい牝豚を一匹、この低地で死なせたことがあったね。愛すべき盗っ人めがモロコシの穂軸を一本、頂戴され、置いた場所で夜食を取られた後で、地面に落とした一粒、二粒の実の上に横になられたんだ。夜明けを迎えるまでにモロコシは、によきによき大きくなって、その衝撃で、哀れ牝豚は死をお迎えになっちゃったのよ。おいらは、金輪際、この土地にゃあ何も種蒔きはしねーことにしてるのさ。自然の摂理はアーカンソーに熊狩

りの猟場を意図されているのだから、おいらは、この自然の摂理に従うつもりなんだ。』

英国人の質問者は、かくして、我らが英雄の居住地に関する描写を聞き出し、すっかり満足したような表情を浮かべ、それ以上の質問は控えました。一方、我らが「アーカンソーの大熊」は、度胆を抜く流暢さでもって、次から次へと果てること無く話し続けました。絶えず、周りの聞き手たちからの異義に反論していましたが、特に激しい異義を唱えていたのはイリノイ州を出自とする一人の「生きの良い民」で、曰く、我らがアーカンソーの友人が語るお話は「どうも眉唾の臭いがする」と言っていたのです。

*

こんな調子で夜が更けていきました。そして私は、この目を見張るような人物との付き合いも、きっと夜明け前には終焉を迎えるのだろうと思い、我らが英雄に、これぞ熊狩りという極め付きをお話しして戴けないものかどうか頼んでみました — もう一つ、私自身は狩猟はしないが、熊狩りの話をお聞きする事には絶大な興味を抱いているとも申し添えました。私の依頼に喜びを覚えてくれたらしく英雄は、やおら、私の方へ向き直り、世界で極め付きの熊狩りを話すと口にしてくれたのです。英雄の語る態度には目を見張りましたが、その半分は、英雄の素晴らしく巧みな語り口調に潜んでいました。中でも特筆に値する特徴は、話の重要な部分を強調する際に見せる、英雄の幸せこの上ないという表情だったのです。そこで以下、私が思い出せる限り、皆さまに、その重要な部分を斜体で示し、英雄自身の言葉でお伝えする事にしました。

「旅のお方よ、熊狩りに懸けちゃあ、おいらは場数を踏んで来たのよ。だからね、お前さんのお申し出に添ってお話ししてーんだが、どれが極め付きなのか迷っちゃんだよ。去

年の秋にゃー、暴風が襲った時だったが、愛すべき牝熊の一匹を撃ち仕留めたよな — それから、愛すべき豚泥棒をブラディ・クロッシング [the Bloody Crossing] で撃ち仕留めたわな、さらに — そうよ、おいらは、とうとう極め付きを手にする事になるのさ。だから今から、その話をしてーと思ってるんだが、この狩りじゃあ、かつて棲息したことの無いほど巨大な熊が仕留められたんだ。一匹の例外も無く、巨大な、だよ。愛すべき熊公でさー、多かれ少なかれ、2年や3年は追い掛けた奴なんだ。もしこれが極め付きの熊狩りでなけりゃー、他にお話しする狩りなど、有りゃーしねーやな。でも先ず手始めに、旅のお方よ、おいらにこう言わせてくれや。おいらはお前さんが気に入ったよ、だってお前さんは臆すること無くおいらに依頼し、真剣に耳を傾けて、狩猟に関する知識を得ようとされてんだからさ。その姿勢こそ、居住地で、おいらが毎日のように猟犬たちに教えてたことなんだよ — おいらは奴ら、つまり猟犬たちに大いなる希望を抱いてるんだ。奴らは常に嘆きまわろうと努めてるし、時には突っかかる場所を間違えながらも、ともかく経験を積み、おまけに何か有益なことを学んでるんだからね。さて、と、この大熊の話をするついでに、おいらと、その何人かの仲間が最初にこの猟場へ踏み込んだ時のことを伝えておきてー。おいらたちは、ごく自然に狩猟へと駆り立てられちゃったんだよ。直ぐにのめり込み、狩猟を^{なりわい}生業に決めることは実に簡単なことだったね。一人の先達、年老いた猟師が、おいらたちが熊狩りには正に相応しい猟場に踏み込んだことを納得させてくれたよ。さらに親爺さんは、この猟場の素晴らしさを感動的なまでに論してくれたし、その確信を実証するために、サッサフラスの樹木に付いた爪跡を見せてもくれたんだ。その数ときたら、

おいらがこれまで目にした、選挙の当日^(N)に酒場の戸口に貼り付けられた請求書の数よりも多かったんだ。『どなたが、あの、つまり請求書を樹木に付けられたんでしょうかね』と、おいら。『熊さ』と、先達。『何の為でしょうかね』と、おいら。『分かんねーよ。でもな、事実として、熊公は樹皮と樹木を噛んでんだ、地面から手の届く限りの最高点をさ。だから爪跡から計って、熊の大きさを正確に言い当てることだって出来るんだよ』と、親爺さん。『よーく分かりやした。何かピーンと来ちましたから、後は実践あるのみ、ですね』と、おいら。さて、旅のお方よ、それから、ちょうど一ヶ月後、おいらは一匹の熊を仕留めたんだ。そして実際に計ってみる前に、例の爪跡から、そいつの正確な大きさを言い当てるのが出来たのさ——でも、出来ちゃったので、多に慢心しちゃったんだね——これまでに無く傲慢な男になっちゃっていたんだ。こうして、おいらは精進を重ね、日々何かを身につけていったんだ。とうとう、熊狩り名人^(N)と呼ばれ、この辺りじゃ誰にも負けねー名うての熊狩り猟師として認められるほどになったのさ。この評判を手に入れるのが、議会の第一人者と呼ばれるようになるより難しいことは、鉄の弓矢がキノコより硬いのが当たり前であるほど自明のことなんだよ。実際のところ、熊公どもはずる賢くなっていったね、未熟な熊狩り猟師たちに鍛えられてさ。こうして奴らが手に負えなくなっちゃったもんだから、皆の衆は当然おいらに声を掛けにやって来ることになるわな。そこでおいらは、見初めた熊はもちろんのこと、隣人が依頼してきたほとんど全ての熊どもを仕留めてやったんだ。この状況でも、なお、おいらは熊の群れの中へと歩を進めるのさ。つまり、熊狩りは飲酒と同じ生活習慣みて一なものだったんだ。熊狩りは二つ文句で表現で

きるね——熊は追い立てられ、そして仕留められる、とさ。かくして熊狩りは実に単調なものになっちゃった——おいらが意識しているのは、ただ、熊どもがどのくらい逃げ延び、どこでバテ、どのくらい断末魔の叫喚を上げるかだけなんだ。それと、仕留めた熊どもを我が家まで運ぶのにどれだけの時間が掛かるのかな、もね。お望みなら、手始めに、熊狩り追跡の話を詳細にお聞かせしやしょうか。おいらは熊どもの生態なら何でも知ってるからの一。旅人のお方よ、おいらは確信しているんだ。ところで、かつて一度おいらは、全霊で仕留めるべき熊に出会ったことがあるのさ。だから、この熊狩りの一部始終についてお話ししやしょう。だって普通の熊狩りじゃあ、お話しすんだだけの価値なんか無（ね）——んだからさ。

*

「昔、ある秋晴れの日、おいらは熊狩りに出掛けたんだ。おいらが目にしたのが何だと思っかね、なんと、真新しい爪痕がサッサフラスに群がり付いてたのさ、耳にはしていたが、森のほぼどの木にも、だいたい8インチぐらいの高さに付いていたんだ。おいらは言いたいねー、この爪痕は何かの悪ふざけじゃろうて、さもなくば、こいつは史上最強の熊めが付けた爪痕じゃろうと言うことになるな、ってさ。実際のところ、旅人のお方よ、おいらには、こいつがこの世の物とは思えないまま、先を急いだのさ。ところがどっこい、また、おいらは同じ爪痕を同じ高さんとこで見つけたのよ。おいらは確信したね、こいつは本物だ、とね。この確信は地震の如くおいらの心に突き刺さったんだ。おいらは言いたいねー、こいつがおいらの仕留めるべき熊なんだ——あいつは、おいらのモノなんだ、そんで、もしもさー、おいらが奴を仕留め損なったその時にゃー、おいらは熊狩り稼業を止め

んきゃなんめ一な。そう心に決めた翌朝、おいらが何を目にしたと思われませんか。群れた禿鷹がおいらのトウモロコシ畑の上を旋廻していたんだよ。奴めはそこに居座ってたんだ、と、おいらは言いたいね、だって、見え見えなんだもの。だから、よーく調べたところ、おいらは豚の骨を見つけたのさ。昨日までは、オハイオの民が育てた中でも最良の豚だったんだ。そこで奴をおいらの敷地内から森へ追い出してやったんだが、敷地内に奴が残した全ての痕跡がおいらに告げているのは、奴こそが、*おいらの追い求めているあいつ奴だ*、ということだったんだ。

「さて、旅のお方よ、あのデカイ奴を最初に追跡した狩りの旅で、おいらは少なくとも3度は遠くから、はっきりと目撃していたのさ。その度に、犬たちは奴を18マイルも追い掛けたんだが、疲れ果てちゃったよ。馬もさ、やっぱり、いかれちゃったさ。そんな訳でさ、おいらも、とことん体力を消耗し尽しちゃってね、*おいらの誓い*を一つ立てることになったのさ、つまり*耐え忍ぶのみ*ってこった。この追跡の前には、こんな手こずりは、おいらには起こりえない事だったんだ。でもなー、奇妙なことに奴はおいらをこの状況に慣れっこにしちゃったのさ、おいらが奴に徹底的に疲れ果てさせられる前にさ——だって奴めがおいらを、とうとうこの状況に慣れ親しませてくれたお陰でさー、奴はおいらに長期の追跡をいとも*簡単な熊狩り*だという気にさせてくれたんだよ。何でそうなったのかはおいらには理解不可能だったがねー。そもそも熊が走るなんて驚きだぜ。それにな、こいつ奴が猟犬の群れと馬を疲れ果てさせ台無しにさせた様ときたら、とてもおいらには理解できなかったんだ。だってこいつら犬と馬は、追いかけて始めたら直ぐに、どんな獲物だって追い込めなかったことなぞ無かったんだからよ。

ところで、旅のお方よ、奴はとんでもなく厚かましくなりゃーがった。食べたい時には何時だって、おいらの敷地内から豚を頂戴していったのさ——おまけにハゲタカが奴めの食い散らかしを漁ったもんだから、*奴とハゲタカに懸かっちゃ、おいらの豚は一匹残らず姿を消しちゃうわい*と思ったんよ。さて、奴をしょっちゅう仕留め損なう事がおいらの活力を奪い、おいらは痩せ衰えちゃった。この事態があんまり深刻になり、おいらは悪寒でよりも早いペースで痩せ細っちゃったのさ。何をやっても奴が目の前に出てきやがるんだ——*奴めがおいらを仕留めちゃったのよ*。しかも、だぜ、奴が悪魔に思え始めてきちゃったんだ。この苦境の中でおいらは、奴に最後の一撃を与えこの件に決着をつけるべく、準備に勤しんだのさ。準備万端、心ゆくまで整えて、夜明けと共にいざ出陣。と、喜ばしいことに、犬どもの走り具合から奴が近くに居ることを察したんだ——奴の足跡を見つけるのは猟犬たちには何でもない事だったさ、おいらが何なく街道^(N)に入って行くのと同じだよ。後を追いつつ、とある開地へ着くと、そこに何が目に入ってきたとお思いかえ？ゆったりと丘を登っていく奴めの姿よ。犬たちは直ぐに奴に追い付いたんだが、その訳が、この度は奴の逃げ足に犬たちが匹敵したのか、でなけりゃー、奴にゃあ犬たちの追跡を避ける気が無かったのか——どちらなのか、おいらにゃ、分かんねーわさ。ところで奴は美の権化だと思わないかい？おいらは弟のように奴を愛していたのさ。奴は急いで一本の樹木のところまで来たんだが、その枝が地上約6フィート辺りで股を形成してた——この股に奴は座り込んだんだ——犬たちは奴の周りで吠え立てたさ——奴は犬どもを見据えていたが、その静かな様は、まるで湖面の低い池みたいだったぜ。一人の未熟な狩猟仲間が一団

にいたんだが、おいらの前で射程距離に入り、威勢よく撃ちあがって、一発が奴の額のど真ん中に命中しちゃったんだ。弾丸が当たった時、奴は頭を振りながら、優雅な様で木の股から降りて行ったが、その姿はまるで貴婦人が馬車から降りるみてーに、見るも美しい光景だったよ。奴は怒り狂っており、犬どもなど物ともしなかったが、そいつらは乳に群がる子豚みたいだったぜ。犬たちは間髪を入れずに輪で囲み、適当な距離を取ってた。ボウイー・ナイフでさえ遠く離れてたな。それに奴の目の光る様子ときゃー——猫の毛並みを焦がすほどの炎だったよ。実際、奴は、全身が怒りの塊だったね。物おじしない子犬が、一匹だけ奴に近づいていったんだが、奴の左足で完璧に引っ搔かれ、木っ端微塵に砕かれちゃったんだ。それを目にした老犬たちは、いっそう物おじしたわな。その間においらは奴に近づいて、十分に狙いを定めて奴のわき腹、つまり前足の真後ろに的を絞ったんだ。これで、もし、おいらの銃が不発だったら、^(N)臆病者呼ばわりをされてもしょーがねーや。もちろん臆病者なんかになりたかねーけんどさ。でも、ああ、旅のお方よ、何たることか、不発だったんだ。おまけにさー、体中を捜しまわっても雷管が見つからねーんだ。この苦境の中でおいらは、あの馬鹿な仲間を振り返り——こう言うのさ、『ビル、お前は馬鹿だ。大馬鹿者だ。奴の額を打ち抜くなんて、奴の腹の下の樹木に怒鳴る付けて奴を殺そうとするようなもんだぜ。お前の弾丸で奴は虎になっちゃったじゃないか。此畜生こんちくしょう一めが！奴を追い詰めた犬たちの一匹だって殺傷されたら、おいらはナイフで、てめーの臓の腑を一突きにしてやるぜ、いいか——おいらの怒りは募る一方だったさ。』雷管を失くした上に、銃は不発、おまけにこの馬鹿が奴の額にぶっ放しやがったのさ。おいらは、犬た

ちに近づいた奴が少なくとも10匹は殺すだろうろ悪い予感がして、一瞬たりとも気が抜けなかったんだ。でも、この状況で、おいらは思い違いをしてしまったんだ。というのは、熊は犬たちの輪を跳び越え、強烈な唸り声をあげながら姿を消したからなんだ。犬たちはもちろん逃げた熊を必死に追い掛けたさ。今回の追跡は短かった。湖の辺ほとりまで来た熊が水中へ飛び込んだからなんだ。そして、奴は湖の小さな中州へと泳いでいって、犬たちが着く直前に着岸していた。やっと捕まえてやれたな——とおいらが口にしたのも、おいらはコートの裏地に雷管を見つけたからなんだ——そこで湖に丸太を浮かべて中州まで漕いで渡って行ったところ、ちょうど犬たちは藪で奴を窮地に追いこんでいたんだ。おいらは大急いで近づいて銃を放った——と、同時に、犬たちを跳び越えた奴は、狂ったように走り寄りながら、おいらの3フィートの所まできた。奴はも一度、湖水へと飛び込み、おいらが乗り捨てていた丸太へ乗り上がろうとした。しかし、奴の体が半分やっと乗った途端に丸太は転がり、奴は水中へと沈むことになっちゃったのさ。犬たちだって奴の周りにまとわり着き、引っ張りまわしていたが、最後にはボウイー・ナイフが奴に深く噛み付いたんだ。ボウイー・ナイフと熊は組み合ったまま湖水の中に沈んでいった。旅のお方よ、この様に興奮したおいらはコートを脱ぎ捨て、ナイフを抜き放ち、自らボウイー・ナイフの手助けとなるべく、熊が湖面に浮かび上がってくるのを待ち構えていたんだ。だが奴は沈んだままだった——ボウイー・ナイフだけが瀕死の状態で浮き上がってきて、群れた犬たちとともに岸辺へとたどり着いたんだ。ありがたい、とおいらは口にしたさ、だってあん畜生めはとうとう報いを受けたんだから。奴の亡骸を持ち帰ろうと心に決めて、おいらは

ロープ代わりに葡萄の蔦を切り、湖水に飛び込み、奴の沈んだ屍しかばねを確認しながら足に奇妙なロープを結び付け、何とか岸へ引き上げたのさ。だが何と、旅のお方よ、おいらは若い鱈どもに噛み殺された方がよかったのかも知んねーや、もし、おいらが見たものが、老いたメス熊じゃなかったら。あの中州での事態のこんがらがり様は説明できないほど神秘的だった。そう考えると、おいらが悪魔自身を追いかけてきたことが、今まで以上に確信できたんだ。おいらは夜になって我が家に帰り着き、眠りについたんだが——今日一日の出来事は、おいらを殺してしまうほどに、気を滅入らせちゃったんだよ。この熊を仕留めるために結成されたアーカンソー狩猟団の全員が、とことん打ちひしがれちゃって、この事実が、ミシシッピ川に沈み込んで行く座礁船みてーに、おいらの心の奥深くに沈み込んだんだ。おいらは、深手を負い二匹の子熊を抱えた熊に負けず劣らず、不機嫌になっちゃったのよ。事が隣人に知れ渡り、おいらは、こう問い詰められたんだ。一端、仕留めようと心に決めて出猟したら、絶対に仕留め損なうことなんて無い、名人と言われているあーのーお一方は一体どうされたんですかねー、とね。雌熊、しかも普通の大きさのだけ、を、馬より多少は大きな牡熊と見間違えるなんて、あーのーお一方は望遠鏡を持っていらっしやら無かったのでしょかね、とね。きっとね、皆さん、と、おいらは返したさ——むかつ腹を立ててさ——きっと、あんたらは、おいらを嘘つきだと言いたいんだろう。いいえ、と皆が口をそろえる。とんでもございませぬ、おれたちは、ただ、このような事は最近よく起こっていることなんですと耳にしているだけで、そんなことは少しも信じちゃいませぬ。ああ、おいらは耐えられなかったぜ——あいつらは馬に乗って立ち去りながら、

死んだ黒人に群がるハイエナのように大声を上げて笑いやがったのさ。限界だったね。だからテキサスへだって出掛けて、奴を仕留めようと心を決め、出来なきゃ死ぬつもりだったよ——そして、おいらは、入念に準備を整えたんだ。猟犬の群れを落ち着かせた。ライフル銃をそれぞれの部品に分け、たっぷりと油で磨いた。先の失敗を恐れ、ポケットというポケットには雷管を入れておいた。そして、おいらは、隣人に、<月>曜日の朝に——と、指定して、さ——<あの熊め>を仕留めるために出立し、奴の亡骸を持ち帰ると宣言したんだ。さらに、もし失敗したら、家主はもう居なくなったんだから、皆でおいらの居住地を分配するようにとも付け加えておいたのさ。さて、旅のお方よ、狩猟に出掛ける正にその日の前日の朝、いつものようにライフル銃と愛犬ボウイー・ナイフともども、家の近くの森に出かけて行ったんだ。いつものように、例の場所にしゃがみ込んでいたらさー、何と、垣根の冊ごしに、奴の姿が目に入ってきたのさ。そうよ、あいつ奴がおいらから100ヤード以内の所に居たんだ。そして、奴が垣根を越えて近付いて来る様といったら——旅のお方よ、奴は黒い薄霧みてーに空へと舞い上がるように見えたんだ。とてつもなく大きく見えた奴がおいらの方へ向って来たんよ。おいらは立ち上がり、慎重に狙いをつけて、奴に向かって発砲したさ。すぐさま奴は振り向いて、鋭い叫び声を上げながら、まるで倒木が蜘蛛の巣を打ち払うように網を越えて歩き去って行ったんだ。直ぐ奴の後を追おうとしたが、口には出せない例のもの（汚物！）においらは躓つまずいっちゃったのさ。そいつは、習慣からか、あるいはその時の興奮からかは知んねーが、おいらの踵かかとの辺りに横たわっていたんだよ。ところが、おいらがシャンと姿勢を整えようとしていると、近くの藪であい

つ奴が呻^{うめ}き声を上げてんのが耳に入ってきたんよ。まるで千人の罪人が呻くような声なんだ。そして、おいらが奴に近寄った時には、奴はもう息絶えてたんだ。旅のお方よ、奴の屍をラバの背中に乗せるのに、5人の黒人とおいらを併せて6人の力が必要だったんだ。積み荷の重さのせいでラバの長い耳がゆらゆらと揺れ、一步踏み出す度にラバはよたよたしてたよ。普通の大きさの熊だったら、ラバは速足で駆けて、その走りを楽しみたかったんだろうがな。奴めの屍がどれほど大きかったかをお知りになったら驚かれること間違い無しだろうて——おいらは奴の皮で寝台覆いを作ったんだが、その覆いがおいらの寝台を包み込み、両端の余りを数フィートも畳込まなきゃなんねー様は、そりゃー、あなたが大喜びされる一幅の絵巻ですぜ。まったく奴めはアーカンソー特有の創造的な熊めでさー、奴めがサムスの時代^(N)に棲息し、サムスンと真っ当な戦いをしたとしたら、あっと言う間に打ち負かしていただろうな。だがな、旅のお方よ、おいらが気に入らないのは、奴の仕留め方と、その後の虚無感なんだ。おいらには何か奇妙な感じが拭い切れないし、どうにも事情が呑み込めねーんだよ——おいらには、奴めが最後に「あー、もー、いとも簡単」に死んじまったことに、どうにも納得がいかねえのさ。おそらく、奴は、おいらが明日にでも仕留める十分な準備を完了したことを耳にしてたんだと思う。だから奴は、死ぬ間際の大きな苦しみを経験しないで済むように、自ら降参したのさ。キャプテン・スコットが狙いを付けたアライグマ^(N)と同じことさ。でも、その説明も、おいらには今一なのさ。おいらには実はこう思えるんだ。奴めは人の手にかかって殺されるべき熊なんかじゃないのさ。そして、然るべき時を迎えた奴めが極めて自然に生を全うしたんだ、とね。」

*

語り終えた我らが英雄は、聞き耳を立ててきた皆の衆ともども、暫し、深い静寂を味わいながら、腰を降ろしていました。私は、英雄の心に、ある秘密が潜んでいることを見て取っていました。それは例の熊に関わる秘密であり、その熊の死をこそ英雄が今、語り終えたのですが、この死にまつわる秘密が英雄の心に強い印象を与えていることは、疑う余地など無かったのです。さらに明白であったことは、何か迷信めいた畏怖の念が、熊の死にまつわる秘密に深い影を落としていることでした——この感情は「森を愛する同胞」すべてが共有するものでしたが、この感情は日常の経験を超越した何かに遭遇した時にだけ、換気されるものでした。しかしながら、英雄が、この静寂に覺^{けり}を付けました。椅子から飛び跳ねるように立ち上がった英雄は、一同に、「寝酒」でも一杯やろうやと促し——先鞭をつけながら、皆と一緒に、心ゆくまで酔い痴れたのです。

私は夜が明けるずっと前に目的地で下船しました。読者の皆様とご一緒に、想像力の及ぶ限り、アーカンソーの我らが友人がミシシッピ川沿いの「フォークス・オブ・サイプレス」で繰り広げる冒険に心からの思いを馳せるのみです。

あとがき

これは Thomas Bangs Thorpe (1815～1878) の古典的な名作 "The Big Bear of Arkansas" (1841) の全訳である。2004年度3年次のゼミを始めこれまで幾つかの授業で学生の皆さんと熟読してきたこの作品を、この度、訳出の形で活字にしてみた。翻訳に当たったのテキストには T. B. Thorpe, "The Big Bear of Arkansas" in *The Norton Anthology of American Literature*, Second

Edition, Vol. 1 (New York: W. W. Norton, 1985): 1535-45 を用いた。このテキストには示唆に富む注が付されており、これらの注も訳出すべきであったが、著作権の問題もあるため、訳文に注の場所を(N)印で示すに留めた。

テキスト内の斜体には深い意味があるため、見にくくなってしまったことを懸念するが、訳文にも斜体を施しておいた。なお、この作品における斜体の意義や、この作品に特有の俗語の使用については、作品そのものの意義も含めて拙稿<"The Significance of Italicized Words: On T. B. Thorpe's 'The Big Bear of Arkansas'" [英文] (『岐阜女子大学英文学会誌 I 澤田助太郎教授退職記念特集』): 135-47/392. [A 5 判]>を参照して戴ければ幸甚である。

作者は、物語を展開させる部分と、物語内の物語(an Inside Narrative)を強く意識する部分とを巧妙に組み合わせているため、区分けを明確にするために、原文にはないが、訳者の独断で一行のスペースを空け*印を付しておいた。また訳文の流れを乱すことになることを懸念しながらも、必要な言葉にはルビを振るとともに、人名や地名など意義深い固有名詞には原語を付しておいた。挿画は、貴重であるため、作者 Thomas Bangs Thorpe については<Keller, Mark A. "Thomas Bangs Thorpe." *Dictionary of Literary Biography*, Vol. 11 [American Humorists, 1800-1950, Part 2] (Detroit, Michigan: Gale Research Company, 1982): 498>から、The Big Bear of Arkansas こと Jim Doggett については<Thorpe, Thomas Bangs. *The Hive of "The Beehunter," A Repository of Sketches, including Peculiar American Character, Scenery, and Rural Sports*. UMI Books

on Demand, 2004: Frontispiece>から、それぞれ使用させて戴いた。

最後に、底本としたテキストに付されている、作者についての略歴を訳出しておきたい。<トーマス・バングズ・ソープ [Thomas Bangs Thorpe] は 1815 年 3 月 1 日にマサチューセッツ [Massachusetts] 州のウェストフィールド [Westfield] に、メソジスト派の牧師の息子として生を受けたが、父はソープが 4 才の時に他界した。ソープは、幼年時代を母方の家族と共にオランダ系色の強いオルバニー [Dutch Albany] で過ごし、夏にはコネチカット [Connecticut] 州で父方の祖父母と過ごした。1827 年、家族と一緒にニューヨーク市 [New York City] へ移った。1830 年、アーヴィング [Irving] の初期作品への挿画家である、一風変わった画家ジョン・クインダー [John Quindor] と共に絵画の勉強を始めた(ちなみに、ソープが 1833 年、アメリカン美術アカデミー [the American Academy of Fine Arts] で、最初の個展を開いた時、その主題はイカボッド・クレーン [Ichabod Crane] だった)。1834 年から 1836 年に掛けて、ソープはコネチカット州のミドルタウン [Middletown] にあるウェスリー [Wesleyan] 大学に通学したが、健康を損ねて退学した。その後 1837 年の初頭に南部へ出掛け、ルイジアナ [Louisiana] 州やミシシッピ [Mississippi] 州で大農園の家族たちを描きながら、健康を回復した。1838 年に結婚し、翌年、ルイジアナ州の養蜂家に関する気さくなスケッチ風の小品で、それなりの評価を得た。この作品は、ウィリアム・T・ポーター [William T. Porter] が主催する『時代の精神 [Spirit of the Times]』誌に収録され、アメリカや海外で広く再版された。

ソープは、1840 年に赴いたニューヨーク

での訪問でポーターとの友情を強固なものにし、『ニッカーボッカー誌 [Knickerbocker Magazine]』への寄稿の手筈を整えた。翌年、『時代の精神』誌は、『アーカンソーの大熊 [The Big Bear of Arkansas]』を出版した。この2度目の大成功の余波を受けて、ソープは、主に狩猟に係わる沢山のスケッチ風の小品を書いた。絵画も続け、フロンティアの風景や動物画、さらに肖像画に傾注した。その一方で、幾つかの新聞をルイジアナ州で編集した。1845年にポーターが出版した、南西部地方ユーモア最高傑作選集のタイトル（『アーカンソーの大熊、と、その他のスケッチ [The Big Bear of Arkansas, and Other Sketches]』）は、ソープの最も売れた作品名を使用した題名であった。同年の後半にソープは自らの作品『奥地の神秘；あるいは、南西部地方のスケッチ風の小品：気質、風景、田園の狩猟を含む [Mysteries of the Backwoods; or, Sketches of the Southwest: Including Character, Scenery, and Rural Sports]』を出版した。メキシコ戦争の勃発を受けたソープは、挿画と共に、『リオ・グランデ川の我が軍 [Our Army on the Rio Grande]』を執筆した。ホイッグ党の政治綱領に深く係わっていたため、ソープは、長期かつ実利も見込める新聞雑誌的な関係網の確立に失敗し、1854年にニューヨーク市に戻り、そこで『ハーパーズ [Harper's]』誌に寄稿した。1840年、ソープは『奥地の神秘』の増補版を『「養蜂家」の巣箱：スケッチの宝庫、アメリカ特有の気質や風景や田園の狩猟を含む [The Hive of "The Bee-Hunter": A Repository of Sketches, Including Peculiar American Character, Scenery, and Rural Sports]』として出版した。妻が1855年に他界し、2年後に再婚したが、そのころソープは『フランク・レズリー挿画新聞 [Frank

Leslie's Illustrated Newspaper]』の経営陣に加わった。1859年から1861年に懸けて、ポーターの死後、ソープは『時代の精神』誌の共同経営者になった。同時に、なお絵画も続け、注目すべき、ナイアガラ滝の巨大な風景 [a Mammoth View of Niagara Falls] (1866) やアーヴィングの墓の風景 [a View of Irving's Grave] (1862) を残した。1862年に、ソープは、北軍に占領されていたニューオーリンズへ赴き、貧者への大規模な食料配給事業と、下水や衛生施設の拡大事業の任に当たった。1864年に北部主導のルイジアナ州憲法議会の一員として奮闘した後、ソープは北部へ戻り、1869年以降ニューヨーク市の税関に職を得た。ソープは晩年に至ってもなお、新しく登場した『アップルトンズ [Appleton's]』誌に寄稿していたが、1878年9月20日に腎臓病で死去した。

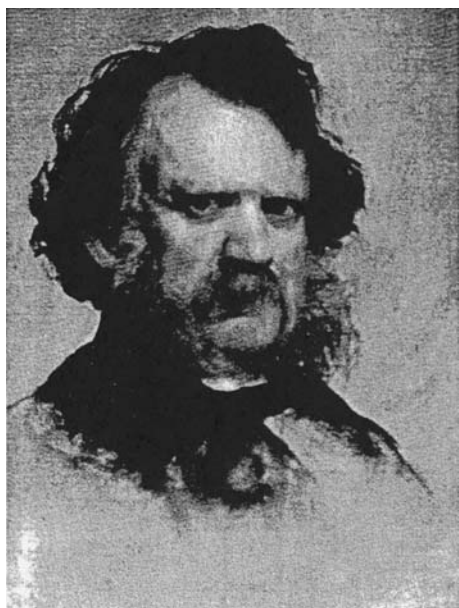
神経過敏で、(ポーターの言に依れば) 繊細で、控えめなソープは、その多彩な能力を開花させることは、決して無かった。だがソープは、一つの小品で、アメリカ文学史上に永遠の足跡を確保している。この小品の題名は「文学における大熊の一派」として永遠に存在し続けることになる。>

誤訳も含め訳出上の不備はすべて訳者の責任である。翻訳に際して多くの方々から種々有益なご教示をいただいた。いちいちお名前は記さないが、この場をお借りして、すべての方々から心からの謝意を表したいと思う。

2005年5月15日

深まりゆく緑の色濃い金城台にて

訳者



Thomas Bangs Thorpe, painting by Charles Loring Elliott



The Big Bear of Arkansas.